

エール

血液センター広報誌 Yell



2016.SPRING vol.01

- 毎年恒例! 11回目の献血応援スペシャルマッチで献血PR
- 県内初実施「キッズ献血」開催(模擬体験)
- H26年度及びH27年度 献血実績
- 私が子どもたちに献血の大切さを説く理由
- 企業・団体紹介
- 次世代を担う献血者たち

創刊号発行にあたり

献血にご協力して下さる方々、病気等で輸血を受けている方々、そして血液事業に関わる全ての方を応援していきたいという思いから、広報誌「エールYell」を創刊することと致しました。皆様の温かいお気持ちが輸血を必要とする患者さんの笑顔のエールにできたらと思います。定期的に発行する予定です。今後ともよろしくお願い致します。

所長 林 泰秀



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

群馬県赤十字血液センター

写真：群馬県赤十字血液センター所長(前列左から3番目)及び職員

毎年恒例！11回目の献血応援スペシャルマッチで献血PR

サッカーJ2のザスパクサツ群馬の協力のもと、平成28年4月16日(土)に正田醤油スタジアムにて、献血応援スペシャルマッチが開催されました。今年は献血バスを初めて2台体制にし、97名の方に足を運んでいただきました。また、エスコートキッズによる入場やキックインセレモニー、県内大学生ボランティアで構成される青年赤十字奉仕団や学生献血推進連合による横断幕PR活動が行われ、場外場内と賑わしました。



エスコートキッズと選手



場外では選手による写真撮影会が行われました
(左上DF5乾大知選手・右上DF22川島将選手)

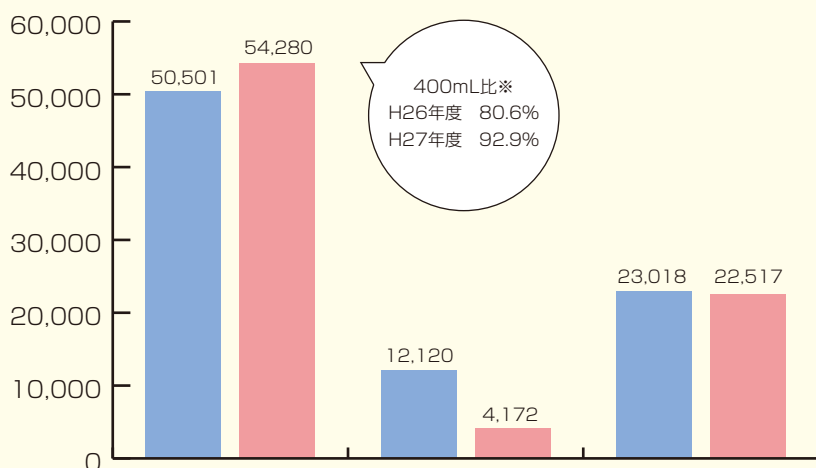
県内初実施「キッズ献血」開催(模擬体験)

平成28年3月20日(日)にイオンモール高崎にて、群馬県内で初めてキッズ献血を行いました。

高崎健康福祉大学高崎高等学校JRC部の高校生たちや学生ボランティアの総勢31名によって運営が行われ、「将来の献血協力者」として期待される3歳から12歳の子どもたちが1,000人以上集まりました。笑顔のこぼれるイベントとなり、大盛況で締めくくられました。



H26年度及びH27年度 献血実績 400mL献血にご協力してくださる方が増えました！



400mL献血は患者さんにやさしい献血方法です

近年、医療機関における400mL献血からの血液製剤の需要が増加しております。群馬県では医療機関からの依頼を受ける95%が400mL献血由来の赤血球製剤です。

また、群馬県内では1日約300名の献血が必要とされています。献血から作られる血液製剤にはそれぞれ有効期間があるため、定期的な献血のご協力をお願いしております。



※400mL比=400mL献血者数/(400mL献血者数+200mL献血者数)

私が子どもたちに献血の大切さを説く理由

「献血は患者だけでなく、 その周りの多くの人に 喜びと笑顔を与えている」

今回は大病を乗り越え、ボランティア活動を通して献血の必要性を説く、
樹徳高元教諭の富澤清一氏とご家族の方にお話しをお伺いします。

—— いつ頃、どのような状況で輸血を受けたのですか？

富澤 2013年11月28日の夕方ころ、気分が悪くなり横になったところから記憶がなく、気が付いたのは12月中旬でした。自ら119番に電話し、妻や娘にも連絡をしていたようです。心臓にある上行大動脈が破裂してしまい、8時間に渡る手術となりました。

富澤夫人 塞いだ後も何度も破裂してしまい、血液が足りなくなって1週間輸血を受け続けました。

—— どのくらいの量を輸血されたのですか？

富澤 400mL献血45人分に当たる18Lの輸血を受けました。子どもたちに話す時には量が伝わりづらいので、石油ポリタンク1本分だよと伝えていますが、今まで50回以上の献血をしていましたが、輸血される量は頭に浮かびませんでした。1人の患者に400～600mLくらいの量が輸血されている感覚でした。

—— 入院中のリハビリについてお聞かせください。

富澤 最初から普段とおりの生活は望んでおりませんでした。トイレと着替えは自分でできるようになろうと目標を立てました。

—— 入院中にできるようになったのですか？

富澤 なりました。退院するころには杖について歩けるようにもなりました。最初から大きな目標を立てずに、少しずつ

できることをやったことがよかったのではないかと思います。

—— リハビリをやっている時に励みになったことはありますか？

富澤 家族に早く良くなってとは言われずに、「元気になるばいいよ。」と言われたことです。入院中に娘の誕生日を迎え、「ごめんね。誕生日プレゼントを用意できなくて。」と伝えると、「お父さんが生きてくれることがプレゼントだよ。」と言われ、励みとなりました。

富澤夫人 最初は歩けるようにはならないと言われていたため、だんだんとできていく度に奇跡が起きたと思いました。

—— 最後に献血者へメッセージをお願いします。

富澤 献血していただいた気持ちが患者に勇気を与え、元気のもとを与えています。そして、たくさんの人に喜びと笑顔を与えています。どんな名医がいても、輸血を受けるための血液がなければ助かる命も助かりません。日々の生活の幸せを実感し、感動し、感謝しながら過ごしています。ありがとうございました。

輸血を受けられた方にインタビューすることで、中々聞くことのできない、貴重なお話をお伺いすることができました。

インタビュー 田村伸雄
群馬県赤十字血液センター
献血推進課推進二係長



富澤清一氏

太田市出身、在住。大学卒業後、桐生市の樹徳高で国語教師となり、クラブ活動ではJRC(青少年赤十字)やインターアクトクラブなどの顧問を務めた。定年後の2013年11月、心臓にある上行大動脈の解離で倒れ、緊急手術。入院とリハビリを経て復帰し、現在は各種のボランティア活動と趣味のアマチュア無線を楽しんでいる。

夫妻でインタビューにご協力頂きました



▲左 富澤晴美夫人 右 富澤清一氏



リハビリ中の富澤氏

企業・団体紹介

一般社団法人 生命保険協会 群馬県協会

生命保険協会は、生命保険業の健全な発達及び信頼性の維持を図り、国民生活の向上に寄与することを目的に活動をされている一般社団法人です。

同群馬県協会におかれましては、県内の地域社会づくりをはじめとした様々な、社会貢献活動をされていますが、その一環として献血推進活動にも取り組んでいただいております。県内の同協会加盟24社の社員や家族の方々へ広く呼び掛けをして、毎年およそ1,000名の献血協力をいただいております、県内随一の献血動員です。

今年も橋本会長、各社支社長や事務局の方々のご協力のもと、5月には2日間にわたり、献血バス3台にて前橋市内の加盟12社を対象とした献血を実施いたしました。



橋本会長(後列右)と社員の皆様

大学・
専門学校で
パチリ★

次世代を担う献血者たち

中央カレッジグループ
(前橋キャンパス)



群馬大学SRC部



群馬大学(荒牧キャンパス)



高崎健康福祉大学

【背景写真:中央カレッジグループ(前橋キャンパス)】